

キャリア教育における自己理解に関連する意識調査結果の考察

畠 一樹 (徳島大学高等教育研究センター・キャリア支援部門)

山下真美 (徳島大学大学院創成科学研究科地域創成専攻)

十亀太雅 (徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻知能情報システムコース)

1. はじめに

本学(理工学部および総合科学部)のキャリア教育では、学生が生きがいを意識した人生を歩むためのセルフマネジメント手法を目的として行動計画書を作成している。行動計画書の作成にあたり第一段階で検討するのが自己理解である。この自己理解は、日常ではあまり意識していない行動の根源にある自分自身の在り方(価値観・信念)や個性・特長などを“なんとなく”という抽象的なものから具体的なものに言語化する。この段階では、過去の経験や感性・想像力・表現力などの能力・スキルなどが複雑に関連しており自己理解の度合いにも個人差が出る。

このような自己理解というセルフマネジメントの因子が、短期的には在学中の正課内外の活動に、中長期的には就職後の定着や活躍をはじめとした社会活動に大きく影響する可能性がある。特に在学中より社会人以降の影響が大きく、社会問題化している早期離職(新卒3年で3割が離職)にもつながりかねない。このような観点から、学生の自己理解に対する意識の現状把握は、キャリア教育およびその後のキャリア形成支援の質を向上するうえで重要となる。本研究では、学生の自己理解に対する学生の意識調査を実施し、その集計結果に対する考察を報告する。

2. 調査対象とした授業概要と分析データ採取

(1) 授業概要

調査対象とした授業は、2021年度前期に総合科学部2年次を対象として開講されたキャリア教育科目「キャリアプラン(選択必修)」で、履修者総数は97名であった。講義内容は授業計画(表1)にあるように、講義前半で自己理解を深めるための多角的な下準備を済ませ、後半の第10-11回目の2回の講義で自己理解を実践した。

表1 授業計画

1	ガイダンス	6	人間力の必要性を考える	11	自己理解を深める(2)
2	キャリア教育の下地をつくる	7	企業を取り巻く環境の変化と求められる人材	12	行動計画を作成する
3	思考力を養う	8	キャリア形成の事例を学ぶ(1)	13	問題解決を考える
4	時代背景を踏まえる	9	キャリア形成の事例を学ぶ(2)	14	経験の必要性を考える
5	社会との関わりを考える	10	自己理解を深める(1)	15	総括授業

自己理解を具体化する中で、生きがいを分かり易く意識するために、「好き」「得意」「気持ちいい」の3要素で表現した。3要素のうち「好き」と「得意」は自分本位(利己的)な視座で自己実現を対象としている。一方、「気持ちいい」は2~3人称の相手本位(利他的)な視座で自己超越(社会貢献)を対象としている。その2極を統合することによって生きがいを顕現化させた働くイメージを描くとともに、それをセルフマネジメントしながら実現するための行動計画書を作成する。

(2) 分析データ採取

分析データは、本授業で課題として提出するレポートコメント(教務事務システム)とアンケート(manaba)のデータを使用した。回答方法は学生による自己評価とし、選択式と自由記述式の両方を用いたが、自由記述式についてはテキストマイニングによって取りまとめた。

3. データの集計結果および考察

データの集計結果については、前述の生きがいの3要素を考慮しながら考察を加える。

(1) 好きなこと(自己実現 1/2)

「好きなこと」は、図1の好きなことマトリクスにおいて、動機軸(内発的動機と外発的動機)と時間軸(持続的と一時的)の2軸で分割された四象限のうち、内発的かつ持続的の象限に属する“関心”の状態を「好きなこと」とした。この結果から、内発的動機で動いている学生の割合は93.5%(興味[54.5%]、関心[39.0%])と高い割合を占める。一方で内発的に行動をしているが興味から関心に移行できていない割合が全体の半数以

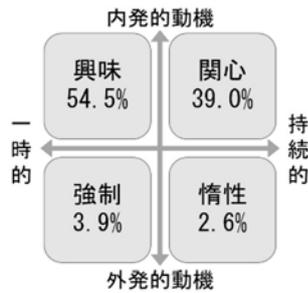


図1 好きなことマトリクス (N=77)

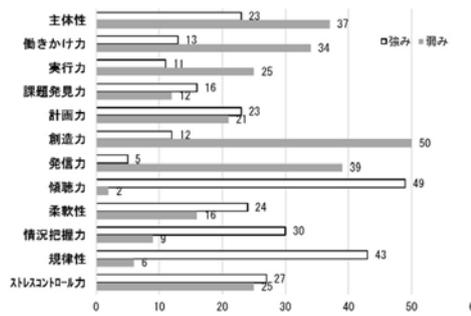


図2 社会人基礎力 (強みと弱み) N=72

12の要素	強み	弱み	強み/弱み	備考
主体性	23	37	0.62	
働きかけ力	13	34	0.38	弱み3
実行力	11	25	0.44	
課題発見力	12	16	1.33	
計画力	23	21	1.10	
創造力	12	50	0.24	弱み2
発信力	5	39	0.13	弱み1
傾聴力	2	49	24.50	強み1
柔軟性	16	24	1.50	
状況把握力	9	30	3.33	強み3
規律性	6	43	7.17	強み2
ストレスコントロール力	27	25	1.08	

上になることが気になる。コロナ禍以前との比較データがないが、入学時から遠隔授業が主体で体験量の鈍化が影響し、生きがいの本質を意識できる状態に至り切れないことが懸念される。

(2) 得意なこと (自己実現 2/2)

専門性に加えて汎用性スキルが求められている中で社会人基礎力を確認した(図2)。この結果から、相手から自分への“内向き”なスキルが強みで、自分から相手への“外向き”なスキルが弱みになり、意識の方向性の偏りの傾向が確認された。

さらに、行動特性(コンピテンシー)を5段階で自己評価した結果(N=92)、レベル1_受動行動[8.7%]、レベル2_通常行動[44.6%]、レベル3_能動行動(セルフマネジメント不十分)[45.7%]、レベル4_創造行動(セルフマネジメントできる)[1.1%]、レベル5_パラダイム転換行動[0.0%]と能動行動はできているがセルフマネジメントができる状態ではない傾向にある。以上から、得意なことをより深く、より多彩なものにするために持続的なセルフマネジメントが直近の課題になる。その解決策として「好きなこと(関心)」への焦点合わせやビジョンの更なる明確化、努力ではなく夢中(フロー状態)を意識した「得意なこと」の鍛錬などが効果的であると考えられる。

(3) 気持ちいいこと (自己超越/社会貢献)

働き方のとらえ方として「ワークの4段階」を定め全体10ptの意識配分を評価した結果(N=81)、①お金(生活・趣味)のためで量をこなす“やりがい”だけの段階のライスワーク[4.0pt]、②“やりがい”から“生きがい”のうち「好き」と「得意」を包含した自己実現の段階のライクワーク[2.4pt]、③自己実現に社会貢献が加わって生きがいの三要素をすべて包含した段階のライフワーク[2.3pt]、ライフワークを他者とエンゲージしながら影響

範囲を広げる段階のライトワーク[1.2pt]となった。この結果から、ライス、ライクという利己的自己実現までのワーク段階は全体の6割強を占めている。一方で、ライフ、ライトという利他的自己超越のワーク段階は3割強となっている。つまり、利己と利他の割合が2:1程度の割合となっている。このような1人称への偏りが就職以降に発生する課題の要因になると考えられる。

別の視座としてマズローの欲求段階について、各段階の意識配分ではなく、主にどの欲求段階に属するかを選択する方法をとった結果(N=89)、生理[0.0%]、安全[13.5%]、所属[16.9%]、承認[57.3%]、自己実現[12.4%]そして自己超越[0.0%]となった。全体の9割近くが承認段階以下であり、自己超越の割合[0.0%]とキャリア発達上の懸念点となる。卒業後、生きがいをもって働くために、自己超越(他者貢献)が前提となる中で、キャリア教育の知識での習得だけではなく、在学中のキャリア形成の段階で自己超越の必要性を感じる経験が必要であると考えられる。

4. 今後の展望と課題

本講義で自己理解の機会が少なかった学生にとっては特に効果的な気づきを促せたと思われる。これを機に、就職だけではなく就職以降の生きがいを意識した人生を歩んでもらえることを展望として挙げる。一方で、展望の実現にはセルフマネジメントが欠かせない中で、意識できていない学生が多く存在していることは重要な課題である。授業における自己理解は机上でイメージ化した仮説段階にすぎず、その後のキャリア形成で仮説を検証し、継続的に改善することがとても重要となるので、教育後のキャリア形成の支援体制の更なる充実も検討していきたい。